



漢保

雜  
10  
八

9  
3585  
8



門 僧  
號 355  
卷 8

賢女貞女判目錄

賢女貞女判目錄

じらさぬの表れ事 付リ 賢詩歌評判義論の表  
りーのうへの事 付リ 同  
るらるけり事 付リ 同  
す急は心苑の表 付リ 同

明治二十六年十二月五日  
坪内雄策氏寄贈

門 口 9  
3585  
巻 8



賢女貞女の辨

昔の世 源氏物語中

むらさねのふとすえしハ按察大納言の非を  
父母にもよくをくれたまひ母をこれ思ふを  
かれがまゝ母をのぶりとてハ女細云とす  
これのひりありていとよふ屋一かひ  
源氏物語のやこしはひハ  
おりのことには  
まはるは  
なり



いとあつてすぢれ子と誓い—とぞれのうづま  
にいそあそび給ふと保氏れま病のおちりり—  
ひまぢれく—れをい給ひとて—まいぢ給ひ—  
席に世らん—とあひい給ふりて—あつら系に  
より給ひいと念ひよの給ひ—とて—いぢれ—  
—とくむく—とせ給ふり誓ひ—とせ給ひ—とあひ  
まぢぢ誓い—とて—いぢれ—とて—いぢれ—  
—とあひのあひ—とて—いぢれ—とて—いぢれ—  
—とくおり—とせ—とて—いぢれ—とて—いぢれ—  
—とくやう—とあひ—とて—いぢれ—とて—いぢれ—  
—とて—いぢれ—とて—いぢれ—とて—いぢれ—  
—とて—いぢれ—とて—いぢれ—とて—いぢれ—

ともあつてすぢれ子と誓い—とぞれのうづま  
にいそあそび給ふと保氏れま病のおちりり—  
ひまぢれく—れをい給ひとて—まいぢ給ひ—  
席に世らん—とあひい給ふりて—あつら系に  
より給ひいと念ひよの給ひ—とて—いぢれ—  
—とくむく—とせ給ふり誓ひ—とせ給ひ—とあひ  
まぢぢ誓い—とて—いぢれ—とて—いぢれ—  
—とあひのあひ—とて—いぢれ—とて—いぢれ—  
—とくおり—とせ—とて—いぢれ—とて—いぢれ—  
—とくやう—とあひ—とて—いぢれ—とて—いぢれ—  
—とて—いぢれ—とて—いぢれ—とて—いぢれ—  
—とて—いぢれ—とて—いぢれ—とて—いぢれ—

まづしひ又のめをぐおいにまをにかうら給ふかづり  
ぬえにハくされて辨會たらみなる人されども案  
のまといえくそあさどり給はず悲しおしゆさ給ひ  
とそい先は思のうよつげていしぬえひゆさされてあま  
原氏に産れ浦よちりぞれ給ふともづきおろく  
らうりしこもは思れよにひくよは給ふをばいしや  
女もも思とくれしひ給ふる嬰兒見れ母とそつ〇く  
けいぞりすうごくとくんとんはくは産れぬをすま  
とよとらるるまも女もにとくくしづりま  
給ふ次くれぬしういさみしのお物えにわつらけ  
給ふい系れ上賢るくくまのり給給んや少狭も女な  
くたるるしこもは思れぬを産れは産かへくこや産  
乃と病しはまばらるともまらけを原氏物候にこりけ  
まば所要をとらるる

拜

崎嶇富士過山高 温又和平乃聖豪

竊窺紫君保淑德 嗚呼万古則貞道

和歌

時しぬふるみさかともあうりかり  
まらのこもりもゆねよめくま  
くいづる給はこ給もさうり地  
まらひさのゆりまら

評

各期にもじり賢義貞列乃婦女多トと

ことと遊ふ及わりけまふおめく遊すべしと云ふ一貞女  
にハおめく遊より賢女と云べし是より後貞女  
とすべしといひまはくはる一懐くぬ三十七歳よりして  
終一終ふ天も心す一命と云ふ其不幸極命  
終一今世人これと折じ

論

或同云は上にも遊む人さあといふも賢女れ  
名と稱すべし事ハ如何 云松栢れおられて一は  
まはるハ後ふれつるまかり賢女るれば三とせれむ  
より寝にふれきあじすもかきハ遊むるにおもす  
それ人にせぐれてはげれ終日何れもらすすめく  
あつハ貞女列女風なりをさうたててこそころといは

名れども何ともく遊むる威儀あり合せば是も其  
におそれ歎られどもをばしひのりこを愛とよぶ  
見れば痛まうむと賢女と云べしはまはぐれに仁  
愛なる徳持ハ後たれるまに原氏のさる女房おほく  
あづけとれ終ひしと同女の中より一はまに嫉妬あ  
つて中あつるまはとはまにまにさるり子れ母  
よはがごころ原氏もまはまにまの仁愛に嫉妬がく  
サ網さうおとれくおちつると志りて皆あづけ冷  
ふはるまは又一相の終れ終まはまのまはま女と  
しそとまは終るまはまのまはまのまはま  
かたりのまはまとまはまの親子れまはまとあら  
終るまはまのまはまのまはまのまはま

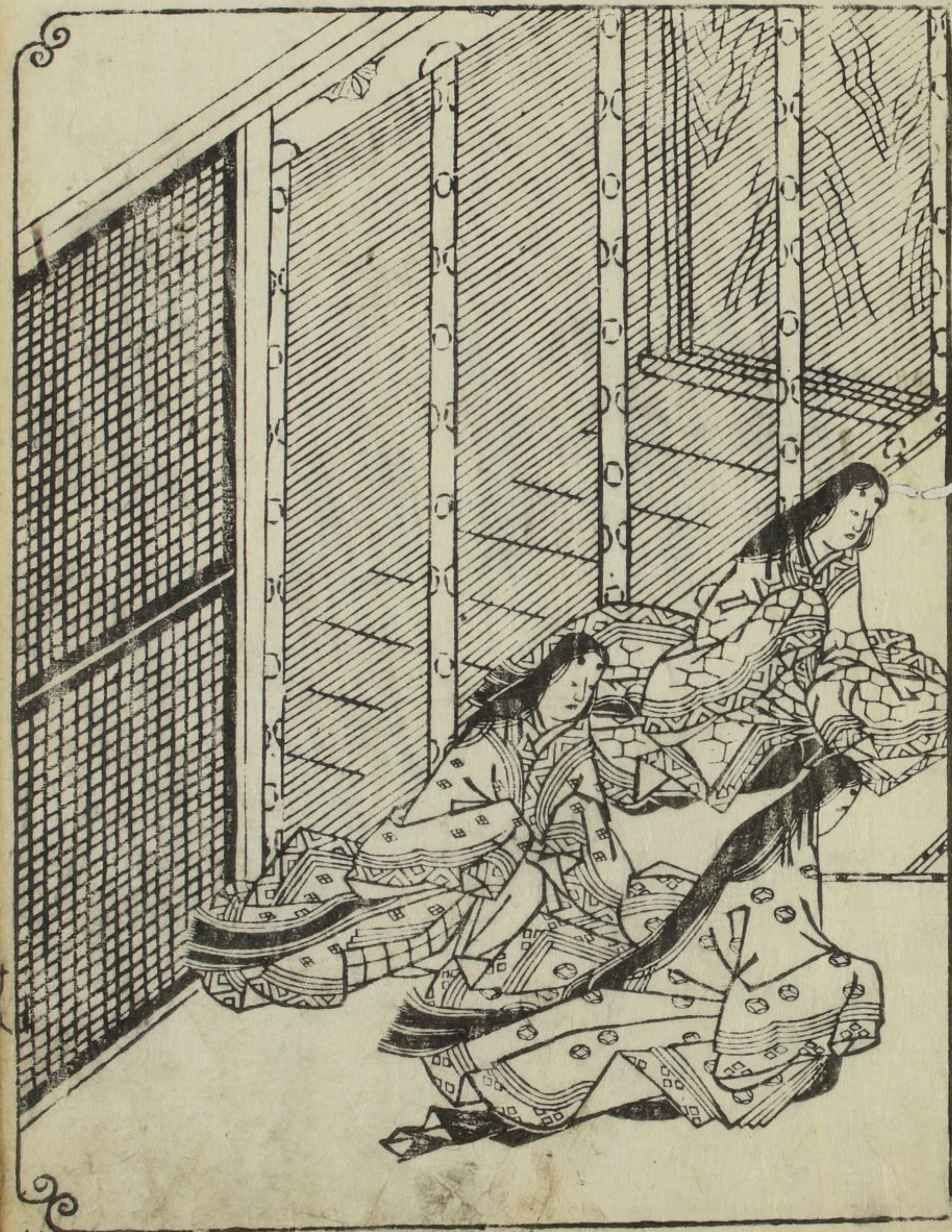
実子なり。娘長の継母にかんきり。その実母にも勝り  
より成人のほも。実母よりいふこと。さういふこと  
娘長のより。その娘も。実母に勝り。その娘も。原  
氏。實れた六条院い。でさ。原氏の舞。し。ぐ。う  
はり。終。う。れ。ま。ぐ。い。ん。ぐ。ん。ぐ。に。さ。し。ひ。く。生。に  
儂。が。う。ら。ゆ。と。あ。う。げ。う。ぶ。い。る。り。し。も。六。条。院。へ  
う。つ。り。終。ひ。く。り。ら。は。な。れ。ま。う。く。し。と。だ。ん。ぐ。も。他。の  
なく。は。う。さ。れ。し。は。あ。れ。と。い。う。う。た。る。人。と。や。ん  
よ。い。候。奴。し。ら。女。中。が。い。し。と。い。う。く。は。徳。共。を。に。和  
し。く。儂。穿。れ。中。より。皆。あ。り。こ。り。と。う。ん。と。い。ひ。ら  
と。い。て。賢。れ。賢。女。う。は。徳。の。志。く。も。い。ん。ぐ。と。や  
同。い。さ。れ。バ。賢。女。に。目。と。お。ら。う。す。ゆ。め。ま。れ。か。ら。や

云負女列女の心志に賢されども徳賢るるにた  
能きよりして其の中れ剛健をこし。それこそ徳  
とて。い。て。押。て。い。ひ。り。恐。び。い。い。ご。も。え。う。負。列。の  
女。の。れ。バ。或。ハ。自。奴。を。お。し。或。ハ。計。畧。を。せ。ら。う。其。衆。と。乃。が  
也。又。ハ。女。吏。に。し。て。之。を。れ。操。甚。目。を。お。ら。う。す。行。状。の。も  
賢。女。の。常。に。う。つ。り。す。た。く。い。ん。の。富。士。れ。山。れ。陰。な。ら。も。卒。使  
に。い。志。の。す。が。より。徳。を。う。く。威。を。と。も。け。色。バ。女。あ。り。と。い  
へ。ど。も。な。ら。づ。く。お。そ。ら。く。し。て。礼。益。信。ま。も。い。ひ。よ。く。と。さ  
や。う。た。り。し。は。素。れ。ま。の。継。子。と。い。ひ。ま。が。う。女。房。れ。大。お。い。さ。れ  
ど。も。それ。だ。に。あ。ひ。た。ま。い。づ。う。れ。り。さ。ら。び。は。ま。れ。と。せ。れ  
ぬ。に。は。も。し。ぐ。か。ら。あ。そ。び。お。給。と。う。た。ま。よ。う。の。今  
日。れ。ら。う。う。す。装。束。の。あ。そ。び。で。れ。に。た。ま。し。く。い。さ

つにありて日れららるるをびわりの東にいまは  
て体はゆるまきうにたきくまひぐりまらありと  
由給にゆきとむねおどろく給ふ時日もまきこのくれ  
と一ツもつれ人よきとせまき志給りありあらはれ  
かほすことづらうと大さにくれてさうらにあらん  
アすさうつてくくれ給ふ時こぞりありつて是て  
かさよゆりまきとくめとけ人よけいふふとせして  
いをとりひ給てさうわすいそにくれたまふなれ  
たまふ其とれの時なごさみづりありおひして  
けいごりまきと係氏改まよりゆきありて給合れ時より  
お給ふをましくえれば三年れ一日一東もつけす  
東日記一日に給二とねづこひし日すつつけのしん

ふとまきさつづきもわきび給ふやうとそんれ  
日記をけりまきとゆきとゆきとゆきとゆきと  
まより給ふをゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと  
うりまきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと  
しやすまきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと  
藤賢女れ速容用とゆきとゆきとゆきとゆきと  
まきといふゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと  
まき係氏ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと  
いづつゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと  
ちせむゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと  
あつたれ給合あり係氏より秋好中更のこゆきと  
まきまきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと





これかきとびー今れ終どもとそくひ終ふれ終ふ  
きバ共折ぐりドヤく何とそく係氏にも見せたり終ふ  
共とこーももワガハしりりいであいであらう  
いづろーもー終ふ六貫貫女と子徳喜のうど共  
あもらー終ふ夕嬰兒れ人とちーそくをあつと終壯  
親にあり終ひてもうつづつかり小兒れ人おちつとや  
くにそめおとれ文のちれどもそくす女にありてそ  
くちとらおをあつひる小兒れ成人れら必れ人にあり  
りあり恥の恥づつお心あもそかり明使より小兒  
六つせられはらひおあくーくがーこげさるハ智恵と  
まーとらこーて成人のら何のやいもそぬりのかり  
は恥ふる小兒とんと月終時についそ教ぜー智恵

終ひかーとれにそく小兒とあさくしてそく終ひと  
し係の上とらゆしと九られ年花けよといわしとら  
とられ進しとらとそくは終ひとそかたれとらつてし  
又系しと係氏は終ひとそく入んまひ終ひとそ付ハ  
終ひと十女あそとそくそらつとに終ひと付りそら  
けもそか終ひとそまーしてあつと係氏終ひとらなま  
非終ひとそそ少納とそ終ひと終ひとといととら  
しとそまそそとのまよつとそくそくそくそらりま  
あふ共おら終ひと心あつとそく果して成人れ終ひ  
女たり大人ハ赤子れんとあつとつとゆとけらそい  
あもこれとあつとらや係氏上のいれなれありさゆくり  
くはせり又あつと人情通せらる友女とらつと

賢女れ村とらべ一平生に居て愛あつてさうさうと  
うば様の目をぢぢらうとさうさうとさうさうと  
うば様の目とて愛とまをさうさうと又平生にさうさうと  
をんさうさうとだにさうさうと異風かさうさうと愛するは  
同威儀ありれとあらた愛れともと痛あありさうさうと  
さうさうと原氏ありさうさうとや 世任にも慣食か  
めあわさうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
然るさうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
さうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
さうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
さうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
さうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
さうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
さうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと

おとらされぬゆゑさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
さうさうと原氏れさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
妻上には素れさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
まの女さうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
にあつたさうさうと原氏れおとらさうさうとさうさうとさうさうと  
てさうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
あつたさうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
あり終る原氏の女さうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
はにあつたさうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
原氏も好女とて元はさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
くさうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
さうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと

徳の終すべからず未だうけしむも物成と見えしに  
さし後まんと用ひ徹細く一めたる教に末持  
又これなうし

同原氏物語の作り物成よしと原氏はと云人もさし  
といひあつた音子と徹又と云ふもさしや 云物成の  
ゆりゆり原氏はと云ふ名もさしと云ふ名もさし  
たまふこれもゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
名付と云ふ人もさしと云ふ名もさしと云ふ名もさし  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
通しと云ふ假説といひ教成の方便といひ庄老といひ  
て遇言といひ又原氏物語の比興といひ作まりは原氏一  
の秘変傳と云ふなりと云ふ人原切して傳と云ふ

といふと云ふ人もさしと云ふ名もさしと云ふ名もさし  
いひ其人の事とせんゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
未揃元又これなうし

一 明成れと云ふも一 情塵守入道のいしと云ふも母の  
帝のいりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
一と云ふ人もさしと云ふ名もさしと云ふ名もさし  
べん人の世れひがりのいしと云ふも母のいしと云ふも  
やんじと云ふ人もさしと云ふ名もさしと云ふ名もさし  
二 下り入道と云ふ人もさしと云ふ名もさしと云ふ名もさし  
くつれゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ぐれゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

浩をえんとくんと月一

さうてあけをゆくくもしたうくはなれ無花散置と下  
ち氏まよとらうくねのよおもりまう一人ありはま  
父入遊もたうく乃人にんせんとあさうくくね  
ひらさうくさうり遊のすいひまじもけひ子保  
氏れまよまらけそまうくまうせうさうり明  
その両舎にまじとどもひまびうさうたて深電さ  
ど上うくやうくさうをびにんそ入氣にまうりて人  
にあとくひさうさうまおー終いづもとはなれまのよ  
こと初といともいりつさゆゑ其巽かるとありて我  
りれ水まよはのまにゆらんゆすくみいさゆり  
はなれまよ明るれ上らうく貞女なるゆとかなまを  
ワれてじつまうくはなれらるりこれまよと保氏物

賛

月清明石中秋夜 山脊松高琴瑟掬

波調琵琶女亦妙 海巖神妣産伊珠

明石上得琵琶妙源氏能琴干時秋有明石月見殿八月十日

夜源氏彈琴入道彈筆後聞明石上琵琶故詩中如此

和歌

琴乃若もあまうりゆのそとにれ法ま

しはうえてーひま乃ううう後

海士のまもまねうしあうー代とゆ

まびつううん思乃むせんま

入るれを飛を思の屋解といつむたうり

評

父を尊ぶるは始も務むるの母御ん下となく上筋一  
らんばも同よさうり分けまに女尊あり地  
新く見るといふも塵埃の類にぞとさう一  
はどこ一れはさきにさす上筋にして女  
いふ

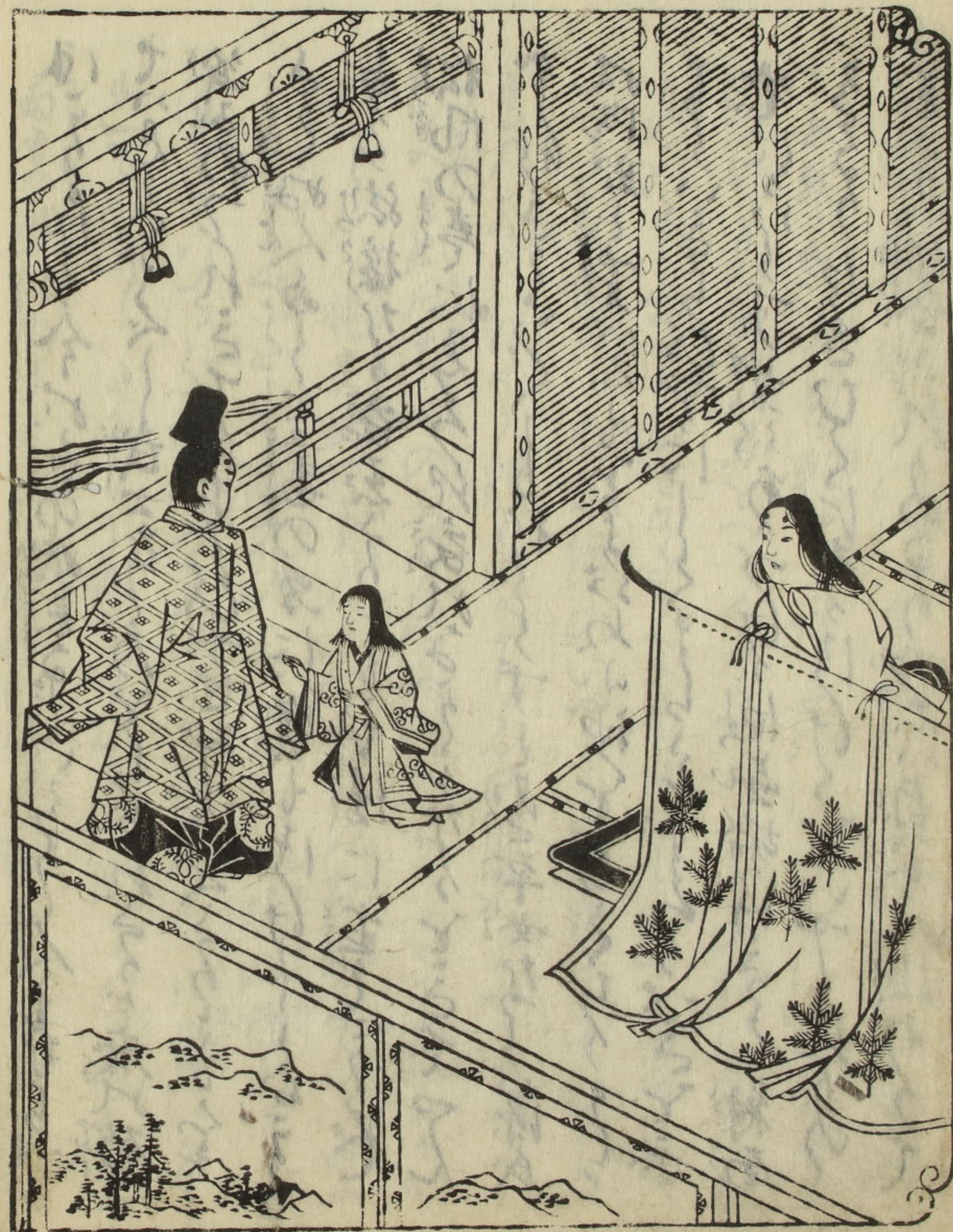
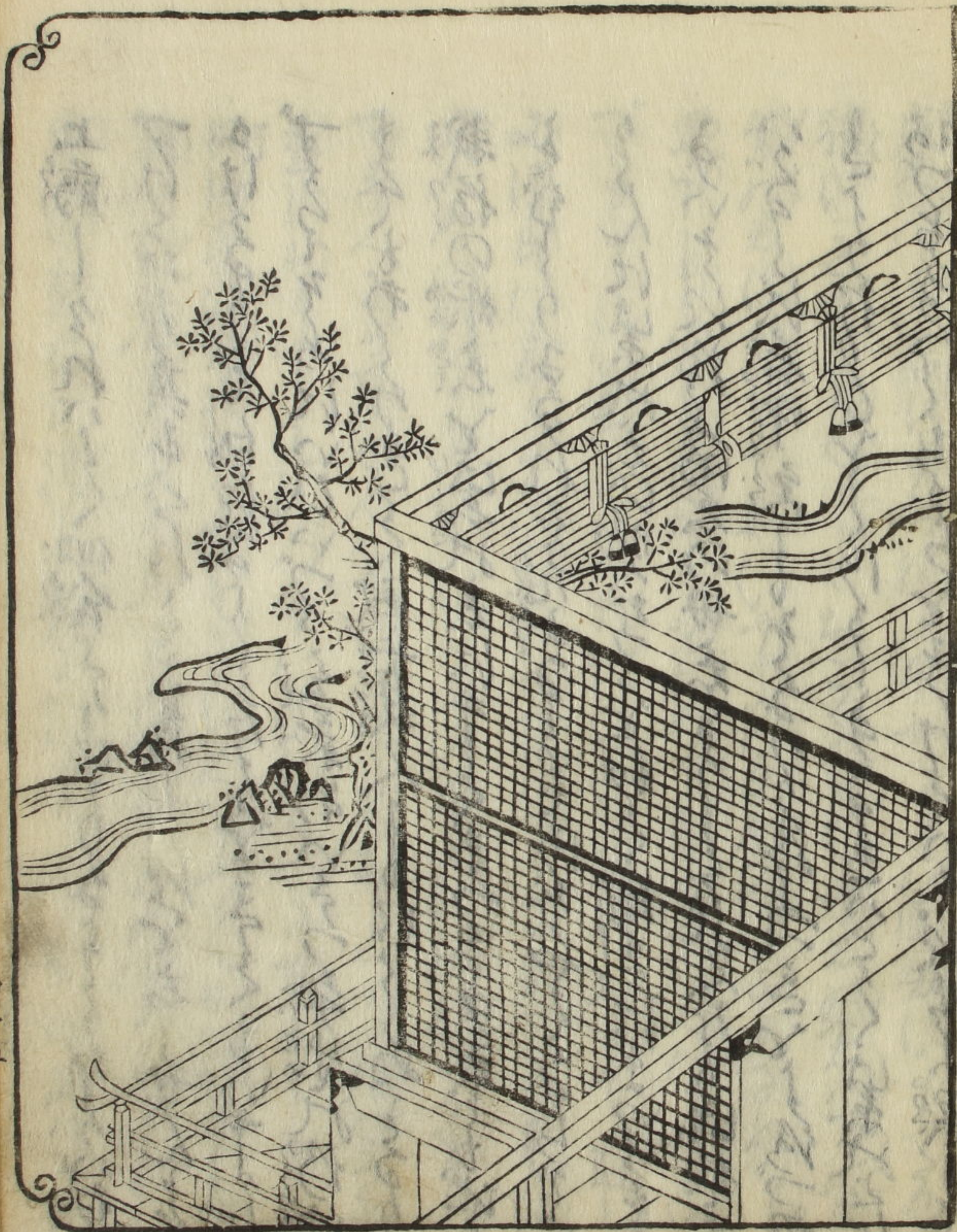
論

同明石上流に貞女ありてをばほしくれ  
秘めてしうわさるや何ぞとわなれりや  
玄不相應とい何ぞや 云よわうくおし  
らとらうとくをういふさうりあす  
まかりい何ぞとをまわらぬの下

しづむとておしあがれといふたふに  
かゝる武士の妻とかりしはどくにて何ぞ  
けさうかろさうんや筆深壑を引書籍と人  
をよむとてひ皆ん乃とさうりい云  
家れ妻あうても志にわれをいづま  
らばくさにあすた人後後と男に  
らに金玉のけりすもいやく口には  
といひ難いあらんをわりのさうり  
おろしれり賤女高人の女子に  
右今序に物のいやくさになら  
び其いやくは人乃とさうり  
と一といふ一休悟道此

我々悪は隣りこれに子孫はまの懸代家に尋乃  
 した我が意とわが頼なり隣りこれに子孫は中より下  
 につけりめされば身とつらさるる子孫の松はきりぬ  
 りめれめとさうふとさるるそとがたりひららげらる  
 いやんりのあり麻本郷のい中とさるるていさり  
 考り尋ひけりゆりゆりゆりの賢なると云ゆと  
 に父まれば大ぬのうゆゆにゆらとゆゆゆゆか  
 たゆらにゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 ともゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 けゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 せゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 ぬゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 ぬゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ほうりたろう今よをの飛ぶるゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 てハ見さるるゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 海みのつれさてゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 とくぬ人ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 松凡の書にゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 下ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 此出とゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 ちゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 世にゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 るゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 志ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ







きの儼能くして今備ぶればおにあくす又その  
 と癒りて原氏の仁愛なる人なり其意一人と  
 ありてそくし不仁利欲るるす亦もたふしては  
 原氏に厚敷とぬらりののわきとてくつりて身  
 質素りて矯る一はま退刃の時も良友と守  
 てるとひるせ給ふ存せ好まざるす徳をひく人  
 に不に不なる人なり好まにわくすも原氏の  
 好色なる人歟まは不仁とせたり唯も義に徳を  
 事む原乃上に射しておれ人くハ皆妻よ似  
 せとと後せれあせりてきとひよあらす其時は  
 かみく乃人の女表ふるもりもは人乃なり人  
 に親と不眉目と一なり何もそ時の風俗なりとく

今備ぶるす今れ時する入道もまいつと明を  
 同いすゆと原氏も今この世に出れて今のをと  
 去く心愛をも好む一婦人にならざるも氣象は  
 其時代よハいもてななり一ふり人にも愛み  
 の所とあらざり一なり延喜聖帝といつても原  
 氏もと見えたりもまねる異端よりいつるおき  
 同美敏端のどれハめも賢女にあらずやとるに  
 貞女といつてハ何や 玄孟子序にいづ水  
 精とのどくしてらげらるあらば光輝温と険と  
 るり明るれどれハ其徳い系系にどく一とふ及と  
 らけりたるとハ白梅とハ梅のどく一白ひわりて  
 らくつれとく一と山ぼくつれあるれらるる一

うす

花散里と申す一はさるるれもは行なりしうどさ  
りのやうふふして女しく嫉妬なくたまさるれ源氏  
出でしやれくおひてまらけもくまらうあまら  
しれにさるるもく増よの我れみづらの容のあま  
ようめがうらうらにさるるおほきに我れのみく  
源氏にあおさるるは似合しうぬまるとおひ  
りして源氏花散里のこしにとゆりたまふ時ハ源氏  
かたなくおぼせどもわがなとゆりて我れハ心帳  
をさるるやまらつてさるるれららりづりて  
あ抱づりのやうそふ糸院におりまらしなうぐん  
まゆれじつまられ髪りもあうらうとさるる夕暮

の文をまひひくいとくもさるるれりくちさ  
めと一はさるるれららり人なり

賛

春往屯微花散郷

馨芳蕙橋良婦章

子規不忍過三轉

莊驛童聞言嘆當

物語作者花散里之容屯喻于蕙橋干時夏五月源氏入  
花散里之室月澄子規啼有和歌故詩中如此

和歌

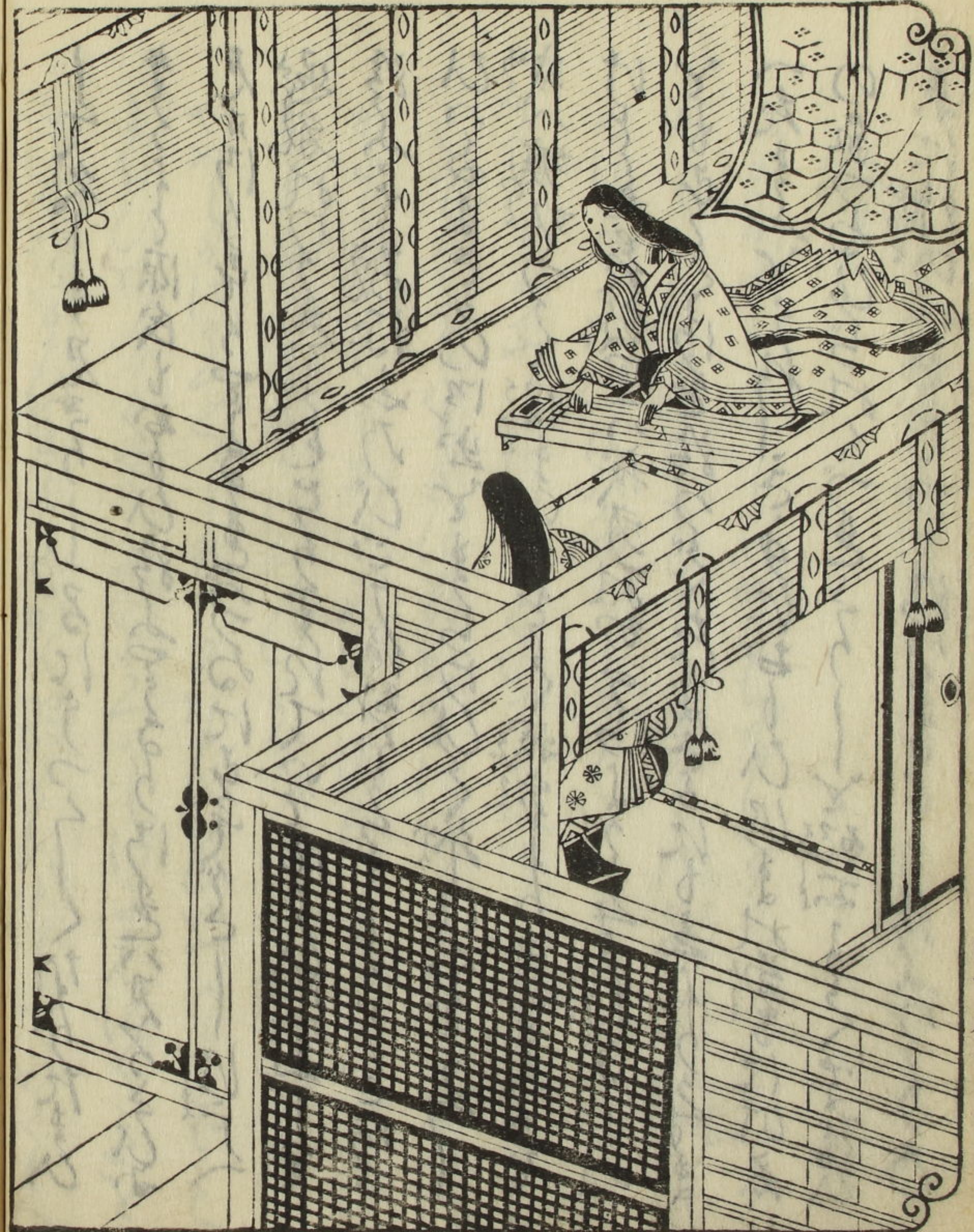
花らりくいのゆがふけもきくらをまの  
あはしーくひらるる山ほくくさ  
あなくあいらもあまらりたらげれの  
華まほけまほけうらうらひく

女系華をばもまきり源氏をばひねり

譯

け若あまりいもいぬわらふれどもくがらあまき  
女一多れば源氏もさくぞい一は篇本れおほひ  
ゆに左のびくうひさきとさく一を心月か  
人乃とりう一にしもくすもあつ  
とくちういふもに花教里にほいもり帯い  
わられよくもあらぬゆへ源氏もさく一け  
まじもあまもいにあいしあひして女喜女一  
やうらにさく一もさくさくさくさく  
まじひらひらさくさくさくさくさく  
もさくさくさくさくさくさくさく

して久一うんざり一るはうつく一かなりたまひ  
きうとと源氏もおひ結あまりけさくさくさく  
見かたりさくさくさくさくさくさく  
退れれつさくさくさくさくさくさく  
終ふまあはさくさくさくさくさく  
ひあまさくのほ出とまらうびくかにかをさく  
或ハ嫉妬うく恨まいらさく一我方より方とありそ  
けども花教里ハ我あれつらようすむすむす  
ともさくさくさくさくさくさくさく  
つたまよとらけいにおひひまされあまにけ  
のあつあひられくつさくさくさくさく  
系に作のむせくつさくさくさくさく



事とていさなれぬ世のやうにありひたまひ  
 源氏ゆゑのしらもまきの世をさのよとさうらむ  
 ぶさく一乗もねぬ中のでいさくもの天分  
 知りつる人なりけりばうほまもくも見すくら  
 まは六多世よりつり給ひ世にぬりて給ふ  
 けまね松枝のきくひの若女といふべし貞女にお  
 うぶのわりのおよむさうらむ列女よまもさうらむ  
 におまもむけりつるあはれ

一  
 未播種とまうし常陸の娘をり思ふて  
 美人乃うどにいつりおまゝに給えさればわく本の  
 美ひとつとつとつに額をわく白なますれ  
 きのり只髪のおがさむらいつり命婦といふ女に



そらさしとて源氏かみひ給ふはささどと源氏八柱  
 まるくゆまは口もさるまごハ誰かかくんごうし人そ  
 ばさしとてささく給はずこれ源氏相伝の愛するよ  
 つこれね女のさうしなり今ねさの人のささくは  
 らんや又まにんむくおらまてよめ給婦さし給  
 みさるればなるひもさうらばさし給むらび右風まてお  
 ねまのまもてさうらび現今のなまうし地はづるま  
 ら大さしに引きまゆるし一とていさくもの天分な  
 らねまもささくささく教ゆる師なけまごさ  
 らひさうさうさうねりらうまもれおまの地ゆふ  
 んどそにおまもくハ女さうして病おつまもささく

賛

紅華在鼻醜慈唇 德晶表裏光明諱  
 惜也野夫進玉石 哀怡容色過書真  
 源氏歌云

かろくし色となさうに何よこの  
 すまはむ死を神よりうきけじ

未摘花曰紅花因之名此君鼻之赤如紅華也

詩中紅華喻形醜光明此君之操也玉石與容色

書真皆指物語而歎不知源氏之本意哉

和歌

うつくしれいらも足にうられなるの  
 すまはむ死を神よりうきけじや  
 ならわかれ人のうきもとてうき

久はたつて死ものとも色う

二首戒好色

評

夫好女にも好色淫私するありとぞわづらひありき  
 ひわいけもバム乃いやうとありけいまはとぞわづら  
 ぬなりともむじさぼらんあもまう女れ情を  
 公家貴友と死ハをの智ととも人の富美と  
 我れとづられ貧にも届くは源氏家  
 に三年位指の同じく長へ給ふ其美とて  
 此の小方常侍へ下りていざかひりて我れ  
 の仕者よせんとおのふんりていざかひりて我れ  
 一とて一とてとともむじさぼらんあもまう女れ情を

おははは理とく人ともなれどくづせうしりたり  
父のなまをくく廣く家なれどありて父の  
下を教にせんとのぞめども古文の形見とて  
給はず又古文のうらぬをいほよとありてのぞ  
めどもあらはれりてとてしうかへとせ給くと  
給われどもありてとてまがらふもいほよと  
めこれとてしうかへり律教よとてあら  
中世のまをにるのらふまへし一石はま  
へといひまよとてしうかへりまよとて  
まよもまよとてしうかへりまよとて  
のらふまよとてしうかへりまよとて  
まよとてしうかへりまよとて

まよとてしうかへりまよとて  
まよとてしうかへりまよとて  
まよとてしうかへりまよとて  
まよとてしうかへりまよとて  
まよとてしうかへりまよとて  
まよとてしうかへりまよとて  
まよとてしうかへりまよとて  
まよとてしうかへりまよとて  
まよとてしうかへりまよとて  
まよとてしうかへりまよとて

論

或同原氏はまのまよといへども花散里れ  
入つてまよは未携花のまよと何とて入つて  
まよやた極よかこしらわりてハ仁愛とハ





一いつ 遠くお里のふかきへたなうへもよめた  
 まゆりれ<sup>おん</sup>おん<sup>あき</sup>い<sup>い</sup>い<sup>い</sup>も<sup>も</sup>年<sup>ねん</sup>は<sup>は</sup>終<sup>はつ</sup>と<sup>と</sup>晴<sup>は</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>人  
 からのや<sup>や</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>ず<sup>ず</sup>とい<sup>い</sup>ど<sup>ど</sup>か  
 け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>花<sup>はな</sup>敷<sup>しき</sup>里<sup>り</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>  
 ばかり終<sup>はつ</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>も<sup>も</sup>  
 は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>終<sup>はつ</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>終<sup>はつ</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>  
 未<sup>み</sup>掃<sup>はら</sup>む<sup>む</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>れ<sup>れ</sup>り<sup>り</sup>ど<sup>ど</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>  
 う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>  
 氏<sup>うぢ</sup>を<sup>を</sup>終<sup>はつ</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>  
 ね<sup>ね</sup>ん<sup>ん</sup>情<sup>じやう</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>お<sup>お</sup>ね<sup>ね</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>  
 一いつ

思れどもも何いままに人のうらむとてあつたは  
一々しひかよりやまも源氏れ物成もよ  
と上福かよむバあつるやれもひかよ  
給ぬせんあつて一々らバ誰わりて未摘気は  
若とひまつげやんや源氏系に居給ふとんま  
でいけりて貧乏よあつり一六はむら難  
は源氏もひかよまより一々て世に  
るつらふんやなれバよに女もあつた  
たうげまほも給ふまど交とひかよ  
とにとてむら

或同夫殿後のごとく其勇あつると  
の給より交れぬ貧乏なりといども  
度は合服よとげら考子よとて一何ぞ貞女とい

いざや 是は空気候の美よあつて  
すべしよ一其上にもいれ婦服とてとて  
船のよの皆野うして女なりんはも  
人かちももまご貞女におよぶあり  
あり其けやあつたけしよとて  
とてはの美よをまらつて

同源氏とていれ人かちもひかよ  
今其殿の詳とていれ乃善なり  
に行ぞ式其美をとらばる只い  
ばや 美をとらばるはあつた  
とては美をとらばるはあつた

流わりのく書れ物事をあらざるゆへは著せしむ  
とこそ彼と既よのこん何るゆへは其書と人出する  
はゆす作志の北よけあらは後まて罪なり物  
三代王と抱て女と切し一農まも農まは  
罪とありく書に道じももを人か心といひ  
中ぬれ玉みぐ兒ももなりといひくむのあまを  
あらず源氏物語もまたあらず又を能く書い  
て人からいやれとて記あつてあつてもあつて  
そのの操あもももくくくくくくくくくく  
つすつすつすつすつすつすつすつすつす  
びくも今もあらずまはゆり今もくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

く月花にも野からあつてくくくくくくく  
同じまれ悪女乃罪はくくくくくくくくく  
まわりのくくくくくくくくくくくくく  
源氏の好女といふも罪はくくくくくくく  
といふとも弘徽殿の悪女といふれこれと書  
せんや世の婦人の美とくくくくくくく  
悪女なるれ戒にうけらるるべし一誠は書  
ちわくくくくくくくくくくくくくくく  
じくくくくくくくくくくくくくくくく  
お終くくくくくくくくくくくくくくく  
ん終らけて悪人くくくくくくくくく  
とせん古今人の此の靈なるべし

いお源氏物結乃うらやんよめよ姫も徳容と  
稱せどわまきつゆりといふも野宮にいとまふ  
しるる人好父のまゝかす志<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>のま<sup>ま</sup>に  
くはりなすし

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

